

材木座義輝は限界である

もよぶ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

材木座が誕生日前後にひどい目に遭ったり絶望したり号泣したりと色々限界にききます、最終的にはDSに目覚めた八幡とDMに目覚めた雪ノ下で八雪です。あらすじ書いていて意味がわかりませんが何故かこうなりました。

新刊出ましたね。

私はKindle版を予約したのでまだ見てませんがどう展開になるのかドツキドキです。

材木座にも出番あるといいなあ

目次

材木座義輝は限界である

—
1

材木座義輝は限界である

「ハッピーバースデーわーれー」

11月22日、明日が誕生日の材木座は今までろくに友人から誕生日を祝ってもらったことがなかった為、今年こそは新しくできた友人の比企谷へ祝ってもらおうと一人バースデーソングを歌いながら奉仕部の扉をノックする。

「どうぞ」

いつもの雪ノ下の返答があり扉を開けるといつものように雪ノ下と比企谷は本を読んでいる、由比ヶ浜は携帯をいじっている

「八幡！息災であるか？我は貴殿に伝えねばならぬことがあつて馳せ参じたのだ」

それを聞き比企谷は本から目を離さずめんどくさそうに答える

「なんだ材木座、とうとうラノベ作家を諦める気になったのか？」

「そうではなくてだな、明日は何日か知っておるか？」

「明日は11月23日勤労感謝の日、その目の腐った男が道行く人たち一人一人にありがとうごさいますと土下座をする日よね、無職が谷くん」

「無職ではない、専業主夫志望だと言っているだろ雪ノ下、そもそも働いてないというこ

とであればおまえもだろ」

「あら？ 学生の自分は勉強よ？ 私は今教科に渡って高成績だからきちんと働いていることになるわ、でもあなたの場合国語だけじゃない、数学に至っては底辺も同然、社会人に例えれば数学無職といったところね」

「んな無茶な、それじゃ由比ヶ浜はどうなるんだよ、こいつの場合全教科無職みたいなもんだろ」

「ヒッキーひどい！」

由比ヶ浜は膨れっ面になる

「由比ヶ浜さんはいいのよ、三浦さんや私と遊んで青春を謳歌してるわ、まさに今しかできないことばかりよ、学生のもうひとつの本分の遊びをやっているわ、あなたはひねくられてばかりでなにもしていかないじゃないの？」

「ゆきのーんありがとう！」

例によって由比ヶ浜は雪ノ下へ抱きつき

「由比ヶ浜さん、近いわ」

口では嫌がつているが雪ノ下もまんざらではなさそうな感じである。

「… また百合百合と… んじゃあ俺も学生の自分の遊びやら恋愛やらをやればいいのかよ」

「あなたにそれができるかしら？それができていれば平塚先生にここにつれてこられることもなかったのではなくて？」

クスクスと笑う雪ノ下

「んじやあよ雪ノ下、俺と…。」

「ちよつちよつと八幡、私の話がまだであろう、聞いてくださらぬか」

と比企谷を止める材木座

「んもう、主らは話はじめると止まらないから困る」

その発言に若干顔を赤くする雪ノ下

「ああ、すまない材木座、んでなんだっけ？」

「だから… 明日はな…。」

もじもじしてなかなか話そうとしない材木座

「おい、戸塚ならいいがおまえみたいが巨体がもじもじしててもキモいだけだから早く話せ、由比ヶ浜なんてちよつと引いてるぞ」

「ほむん、だからもう、11月23日は私の誕生日なのだよ」

「あ？ああそうか、おめでどう材木座よかったな」

「おめでどう中二」

「おめでどうぎ、財津くん」

「ありがとう… って違うわ、どこのエヴァの最終回だ、そうじゃなくて八幡は祝つてくれぬのになんて」

「は？今祝つてやっただろ、ああ、プレゼントか、んじゃあこれやるよ」

と比企谷は鞆からマックスコーヒーを取り出す

「八幡、ちよつと扱いがぞんざい過ぎやしないか…」

「話は終わりか？俺は本を読むのに忙しいからこれで終わりだな」

「酷いよ八幡！」

そういうと材木座はそのまま奉仕部から駆け出すが

「ちよつと待ちなさい」

雪ノ下から大声で呼び止められる、まさかひよつとしてと材木座は一瞬笑顔になるが

「ちゃんと扉を閉めなさい、あと廊下ははしらないこと」

と言われてしまい、涙ぐみながら奉仕部の部室をあとにするのだった。

「学内に知り合いなんてまだいるワイ」

と材木座は遊戯部に向かう

「前から私の誕生日は明日だと話していたからな、ひよつとしたら何か考えてくれてたりして」

と期待に胸を膨らませて遊戯部の部室へ入る

「たのもー」

たくさんのゲームの箱の奥で遊戯部の二人が真剣になにかのボードゲームに興じていた

「ああ、材木座先輩、今日はどうしましたか？」

「う、うむ実は明日なのだが」

「明日は休みですね、なんですか？ゲーセンでイベントとかありましたっけ？」

「い、いやそうでなくてだな、明日は私の誕生日なのだよ」

「ああ、そういうえばそんなこと言ってましたね、それで後輩にたかりに来たんですか？」

「い、いやそうではなくて・・・何で皆辛辣なの？」

「まあ、祝ってあげますよ、誕生日おめでとうございます」

「おめでとうございます」

極めて事務的な返答をされる

「・・・それだけ・・・？」

「それ以上なにか？やっぱりたかりに来たんですか？」

とここらまで遊戯部の二人はボードゲームから目を離さずに会話をしている

「ちよつと今大事なところですから黙っててもらえますか？」

「終わったら相手しますんでそこで座って待っててください」

二人ともやつと顔をあげてこつちを向いたと思つたら辛辣な台詞、材木座は「もうよいわ!」

とまとも泣きそうになりながら遊戯部の部室を後にした。

「知り合いが増えた今年こそは誰かに祝ってもらえるのかと期待したのに」

意気消沈する材木座、気分転換に行きつけのゲーセンに行くとゲーセン仲間が2、3人ほどゲームで遊んでいた。

「やあやあ皆の衆」

「おつす」

彼らとはゲーセンだけの関係ではあるがそれなりに親しくしているのだった。

「実は明日は私の誕生日でな...」

「それはおめでどう、んじゃあ好きなゲームのクレジット一回分おごるよ」

「俺も」

「じゃあ俺も」

とあとから来た者も率先して1クレジット分おごつてくれる

「皆ありがとう」

「いいって、来月は俺の誕生日だからその時は頼むぜ?」

「任せるがよいわ!」

学校と違ってワイワイと親しげに話しかけてくる皆を見て

「私の居場所はやっぱりここだけか」

と嬉しさと少しの寂しさを抱える材木座だった。

次の日、祝日のため学校は休み、親からは

「今時の高校生はプレゼントというよりこれだろ」

と現金をもらったのでどうしようかと思案する。

「八幡と戸塚殿と一緒に遊びにいこうではないか！うむ、私の誕生日だけど一杯お金も

らったからおごってもいいしな！そうしよう！」

とまず戸塚に電話するが

「誕生日だったんだ？でもごめん、部活があつてむりなんだ」

と断られる、比企谷へ連絡するが

「あー俺今日は予定があつて無理なんだわ」

と断られる

「結局いつもと同じ誕生日か…」

と悲しくなりながら

「ららほにでも行くとするかのう…」

と一人で出掛けることにする。

ららぽーとにつくと

「何を買おうかな？ラノベや漫画を大人買いしてしまおうか、新作のゲームとかHMMのゴジユラスとかHGのデンドロビウムとか作っても置き場に困っちゃうようなの買っちゃうか」

とウキウキしながら一人でぶらぶらしていると遠くに見知った顔が見えた

「あれは八幡！」

予定つてここに買い物のことだったのかとちよつと嬉しくなつて声をかけようとするが

「マテマテ、あの八幡が一人で来るはずないよな？妹とよく来るとかいつてたことあったから近くに妹がおるのだろうか？あやつはシスコンだから妹との時間邪魔するなとか言いそうだが」

そうは思つても、まあ妹だし別にいいだろうと思ひ声をかけようと近づくと、比企谷は後ろを向いているので気がつかないようだったが、聞き覚えのある声が聞こえた

「ごめんヒツキー、トイレ混んでて」

「トイレは出掛ける前に済ませなさいつて言ったでしょ由比ヶ浜さん？」

「んもーまたゆきのんの真似？どんどんうまくなつていくね」

二人楽しそうに話をしているのを目の当たりにしたので速攻でその場から立ち去る

「八幡が由比ヶ浜殿と… まあそうだよな、あんだけ一緒にいたらそうなっちゃうよな… こんな我よりも由比ヶ浜殿といたほうが楽しいもんな… でも、一年に一度ぐらいは我を優先してくれても…」

うちひしがれてしまった材木座はどうとう限界が来てしまい涙が流れ落ちる、結局なにも買わずそのままららぽを後にする。

帰り道、落ちていくと悲しさよりも段々と怒りがわいてくる

「八幡の奴！態度が酷いと思つたら今日誕生日の我より女を取るとは！それに戸塚殿も電話の時間おめでとうぐらい言つてくれても良いであろう！遊戯部の連中も下級生の癖に生意気すぎる！雪ノ下殿も由比ヶ浜殿も少しは我のことなんて眼中にないような態度を改めてもよかつたであろう！」

色々ムカついてそのまま家に到着する

「この苛立ちどうしてくれようか…」

こっそり購入している薄い本をブーツと見ていて思い付く

「ふん、実際に何かすると私の完敗になるのは明らかだから、文章の中で復習してやる」

と奉仕部と遊戯部をモデルにした小説を書くことにする

奉仕部部长のお嬢様が女生徒に対していかがわしいことをしていると噂がある遊戯

部に一人で立ち向かうが策略に引掛かりカードゲームで完敗、丸裸にされ好き放題たずらされてしまう、その様子を見ていた同じ部員のいつも嫌らしい目で見ていた男に脅されて部室で強姦、その様子を写真に撮られてばらされたくなかつたら友人を連れてこいと命令、連れてきたところで拘束させそのまま強姦、テニス部の美少年の友人も騙してつれてこさせ強姦、そのまま男が気が向いた時に3人は校内のあちこちで散々犯され肉欲の限りを尽くされる、最後は妊娠が発覚したお嬢様とその友人はそのまま退学、美少年は心身ともに深い傷を負い入院、顧問にその鬼畜な所業がばれた男は顔面が變形するぐらい殴られ遊戯部とともに全校生徒にその所業が知られることになり壮絶なりンチをくらい追い出されるように退学、退学後お嬢様の身内に刺されて死亡と救いの無い陰鬱な落ちにした。

「なんかもものすごくやり過ぎな気もするが大分気が張れたワイ、ふん！連中は冷たすぎる！こいつを見せて反応を見るのも手だな。：雪ノ下殿や八幡や由比ヶ浜殿にどうこう言われるかもしれないが、いつもいつもぞんざいに扱っておつて！誕生日ぐらい少しは態度変えてくれてもよかつたであろう！、我がここまで書きたくなつたのは貴様らのせいだと言つてやるか、もうよいわあんな連中友人でも何でもないわ！」

苛立つた材木座はそのまま寝ることにした。

次の日、先日書き上げた鬼畜小説を鞆に突っ込み登校、いつも通りの授業を受けてい

つも通りの放課後を迎える。

「どうとう来たなわがXデー、今まで我をぞんざいに扱いおつて！私の恨み辛みを思いしるがよいわ！」

そう思いつつ教室をでると、比企谷がいた

「よう材木座」

「なんだ八幡」

「あのな、一昨日おまえに酷い扱いをしたからみんなで謝ろうつてことになってな、なんでちよつと部室に来てくれないか？」

「是非もない、ちやうど我も行きたかったところだしな」

今さら遅いわ！

と憤慨しつつ比企谷のあとに続く材木座

「ちよつとここで待つてくれ」

と扉の前でまたされる、中ではなにかガタガタとやっている模様

「もうよいか！人を小バカにするのもいい加減にしてほしいのだが！」

苛立ちが声に出してしまう

「す、すまん、もういいぞ」

そういわれガラッと扉を開くと

「ハッピーバースデー!!!」

パンパンとクラッカーが鳴らされる

何が起きたか理解不能になって固まっている材木座に比企谷が話しかける

「二日遅れだが材木座誕生日おめでとう、一昨日は冷たくしてすまない、サプライズを仕掛けたかったんでな、その遊戯部の二人の提案だ」

「材木座先輩ごめんない、サプライズ仕掛けたかったもんで酷い態度とって本当に申し訳ありませんでした！是非先輩の誕生日を祝わせてください！」

と深々と頭を下げられる

「材木座君ごめんね昨日は部活があるって嘘言つて、昨日遊ばなかったのは今日のためだったんだ。僕にも誕生日祝わせて下さい」

と、戸塚も頭を下げ、由比ヶ浜も

「中二！冷たい態度とつてごめん」

と皆に頭を下げられる

「あ、いや、別に我は…」

材木座は何を言ったらいいか戸惑つてると

「私からもごめんなさい、辛辣すぎたわね、はい、これはみんなからのプレゼント、開けてみてくれるかしら？」

と雪ノ下から小さめな箱を渡される、開けてみると高級そうな万年筆が入ってた。

「いつもしようもないもの書いてるとはいえ一応作家だろう？だからそれにしたんだ、みんなで金を出しあつたんだぜ？昨日由比ヶ浜と買ってきたんだ、モンブランとかじゃなくて安いものではないが」

「八幡……なんで?」

「なんでって、戸塚が祝おうよって言ってきたもんでな、はじめはサイゼとカラオケでいいかと思つたんだが、その遊戯の連中が材木座が誕生日が近づくとつれて寂しそうにしてるから印象に残る誕生会を開いてくれて依頼して来たもんで仕方なくな」

「あら?比企谷くん嘘はよくないわ、誕生会開くからって一番張り切つていたのは貴方じゃないの?」

「おい!雪ノ下!」

「プレゼントの選定も、私たちは最近発売されたゲームとかライトノベルにしようと話していたのに、この男は「そんなありきたりなものじゃダメだ」なんていつて一番真剣に考えていたのよ?」

「ぼぢまーん」

材木座は嬉しさのあまり泣きそうな顔になって比企谷へ抱きつく

「うわっお前ちよつと離れろ!鬱陶しい」

「ふふふ、小さいけど昨日ケーキを焼いたのよ、味は保証するわ」

そういつて雪ノ下が小さなホールケーキを箱から取り出して切り分ける。

「あ、ああ、みなさん、我、我は…」

「よし、皆に行き渡ったな、んじや材木座挨拶をひとつ頼むかな」

「我は… 我は… 三国一のしあゝなぜものげしゅ！」

材木座は感極まつて涙で顔面がグシャグシャになつてしまふ

「では、材木座くん今日だけのサービスよ」

と雪ノ下が隣に座りジューズをお酌したりお菓子を取り分けたりと世話を焼いてくれた。

「ほ、本当にすまぬ、このお礼はいずれどこかで」

「フッフ、これは依頼よ、お礼がほしくてやったわけではないのだからそんなことを気にせず安心してサービスを受けなさい」

そして隠し芸として遊戯部の二人がマジックをしたり、由比ヶ浜と戸塚が振り付け有りで某アイドル団体の歌を歌ったり比企谷と雪ノ下が漫才（いつもの会話）を披露したりした。

そしてあつというまに夢のような時間が過ぎてしまふ。

材木座はしきりとありがとうありがとうと連発してこれで遊戯部の依頼も完了

だなど片付けることになったのだが、問題が発生する。

「あれ？中二、これもしかして」

と由比ヶ浜が昨日書いた原稿を鞆から引つ張り出す。

取り出しやすいように半分ぐらい外に出しておいたのが仇となった。

「あーそれ見せようとしたのか、なんだ、言ってくればよかったのに、今日なら中途半端だろうが設定集だろうが一応読んでやるぞ、雪ノ下の評価も甘めになるだろうしな」

と比企谷

「へえー材木座君が書いたんだ、僕も見えていい？」

と戸塚

「甘くしたのでは彼のためにならないでしょう、いつもよりびびしいくわよ」

といつになくやる気を見せる雪ノ下だったが材木座の顔から血の気が引く

「いやちよつと待ってくれぬか？完成してないしそれは見せるにはちよつと…」

と言い原稿を奪い返そうとするが

「まあ、枚数も少ないし俺が始めに読むからさ」

と比企谷は読み始めるが早々に固まってしまふ。

「はわわわわ、は、八幡…これには理由があつてだな」

全部読み終わったあと

「うん、まあ、あれだ、なんでこういうのを書いたのか説明があるな……ちよつと表に出ようか」

と微妙な顔をした比企谷と廊下に出ようとしたが

「ちよつと見せて」

と由比ヶ浜に原稿を奪われる

「あーちよつ」

比企谷がいったがもう遅い、雪ノ下の所へ原稿を持って行ってしまった。

「とにかくなんであんなの書いたのか早急に訳をいえ」

一緒に廊下に出た比企谷が焦りまくる

「だって……皆我にぞんざいな態度とるし、遊びの電話は断られて、ららぽに行ったら八幡が由比ヶ浜殿と二人でいたもんで腹が立ってだな……これを読ませて我の怒りを伝えたかったのだ」

それを聞いてしまったという表情をする比企谷

「あー見られてたのか、そうだよな、そういう気持ちになるよな、俺にも覚えあるわ、すまん一昨日はみんなでやり過ぎたすまなかつた」

頭を下げるが

「それより雪ノ下と由比ヶ浜だよなあ」

遊戯部の二人は不穏な空気を感じとり、手早く掃除を済ませて帰ってしまっていた。こつそり部室を覗くと雪ノ下と由比ヶ浜と戸塚が顔を青くしたり赤くしたりしている。

「俺もフォロースするから腹をくくれ」

という比企谷と一緒に部室にはいる。

「これについての説明を求めろわ」

といつも雪ノ下の鋭い視線

しどろもどろになりながら比企谷は材木座がいかに辛かったか嫌な思いをしたかを説明した。

「だから、こいつはそういう文章で憂さ晴らしただけだって、実際にはなんもしてないとかわらんذار」

「でもこれは……ちよつとやりすぎね」

「ヒツキーちよつと鬼畜過ぎだよね」

「八幡はこういうことがやりたいの？……僕、お尻が壊されるのはちよつと」

「いやその三段論法はおかしいだろ、違うから、それ書いたの材木座だから、しかもちよつとってなんだよ？グレード下げればいいってもんじゃないだろ？ってか戸塚も

もじもじするなよ！かわいいだろうが！」

比企谷が突っ込みを入れる

「申し訳ない！一時の感情とはいえこのようなものを書きあまつさえ読ませようと考えていて本当に申し訳ない！」

土下座して謝る材木座

「……そうね、私たちもやり過ぎてしまったと思うわ、でもこれはダメよ、私が預かります、二元データは破棄しなさい、それでいいわね？由比ヶ浜さん、戸塚くん」

「ゆきのんがいいならそれでいいよ」

「うん、僕も二人がそれでいいならいいかな……」

「決まりね、ではこの件は水に流しましょう、せっかくの誕生日ですものね、このあとにはカラオケだったかしら？申し訳ないけど今日はこの後急用が入っていたのを忘れていたのよ、本当に申し訳ないけど私抜きでいっていただけないかしら？残りの片付けは私がやっておくわ」

「え？そうなの？まあいいけどよ、んじや頼むわ、ほら材木座顔上げろ、今日の主役はおまえなんだから、早くいこうぜ！」

比企谷はそういうと意気消沈している材木座を引つ張り戸塚と由比ヶ浜をつれて出ていった。

一人残った雪ノ下は

「ふふふ、これはちよつとやりすぎよね、ちよつとだけ修正が必要よね。」

その晩、材木座は途中トラブルはあったものの人生においてほぼ最高の誕生日だったと楽しい気持ちになっていた。

スマホのメールをチェックしていると千葉県横断お悩み相談メールからの返信がある。

「ん？何故今返信が？」

不信に思いながらメールを開くと

『明日の放課後奉仕部に来ること』

それだけ書いてあった。

次の日材木座が奉仕部へ行ってみると雪ノ下しかいない

「あれ？八幡は？」

「比企谷くんと由比ヶ浜さんは来ないわ、それよりこれを修正しなさい」

と赤ペンで真つ赤になった原稿を渡してくる。

「こ、これは… 昨日の？え？なんで？」

「せ、せつかく書いたものだし、それに誕生日だったのだからどんな話でもきちんとしてあげないと、と思つたのよ」

雪ノ下は挙動不審になりながらいいわけをする

「さ、左様であるか」

と修正した部分を確認してみると

「遊戯部の下りがごっさり削除されておるな…ん？名前が雪ノ下とか比企谷とか我は実名にはしていなかったはず…しかもなんか強姦シーンがやけに生々しく…我は簡単にしか書いてなかったのに…あ、あのー、これではお、お主らのか、官能小説になつてしまうのでは…」

「ええ、行為を行うのだから細かく書かないと伝わらないでしょう？」

「な、何故そんな必要が…し、しかも雪ノ下殿が部屋に入ったら隠れていた八幡が突然襲つてきて、無理矢理唇を奪つて下着を剥ぎ取りとか…も、もしや雪ノ下殿…こういう願望が？」

「材木座君、それ以上言うのとそれを無理矢理読まされたといつて通報するわよ？」

「んな無茶な…」

材木座は後ずさりをし逃げようとするが

「逃げてでも通報よ、きちんと直して持つてきなさい、それと早く読みたいから出来た分だけメールで送りなさい」

それでその日は終わる。

材木座は誕生会のお礼代わりにと思い雪ノ下に言われるがまま修正するが構成事態が大きく変わっており、ほぼ新規書き下ろしのようになってしまうていた。

しかも登場人物はほぼ雪ノ下と比企谷のみで、行為を細かく書くように指示がなされており、しかもそれが校舎内の至るところで行われることになっていた。

「これは八幡に見せられん、しかし良いのかこんなの書いて？」

材木座はとりあえず修正した分だけメールで送信する。

それから2、3日おきに催促やこういうシチュエーションで等のプロットのようなメールが来る、エロ小説とはいえ友人や顔見知りが題材になっており、2次元全てを捧げている材木座としてはまるで興奮できるものではない為、行為の内容はプロットに沿ってのようなエロ小説サイトの文を丸ごとコピーして名前だけ変えて張り付けるという作業の繰り返し、しかもプロットの内容がどれも強姦紛いのものやSMのような特殊性癖なものばかりですがの材木座も辟易してしまった。

ある日の体育の授業

「最近雪ノ下がちよつとおかしくてな、なんか本も読まずノートPCに釘付けなんだよ、由比ヶ浜も相手にしてもらえないからつまんなそうだな、何をみてるのか確認しようとするで見せてくれないし、こつちをチラチラ見では顔を赤くするしでなんだか困ったことになっているんだ、しかも何故かノートPCを毎日自宅へ持ち帰っててな」

比企谷は困り顔、それにピンと来た材木座つい呟いてしまう

「私の小説か……」

「は？お前の小説ってなんだよ？最近来てないだろ？」

「い、いやメールでPCにだな……」

「お前メールで小説送ってんの？何も聞いていないのだから？」

「あ、ああ雪ノ下殿の指示でな、八幡が気に病む必要はない」

と慌ててごまかすが

「は？雪ノ下がお前の小説を？意味がわからんのだが？……ちよつとお前の小説を確認させてもらうかもしれないが別にいいよな？」

深く追求をしてくる比企谷を見て材木座はごまかすのを諦める。

そもそももう辟易してるのだ。この際だから比企谷からも何か言って止めてもらうかと思う。

「……始めにいつておくが今書いてるものは正直不本意なものでな、雪ノ下殿からリクエストがあつて書き始めたのだが、今では強制的に書かされておるのだよ。それに最近雪ノ下殿がプロット書いたりしてるのだから？我が自発的に書いてるわけではないからな？この辺間違ふなよ？全部雪ノ下殿の要望に沿っているのだから？誕生会のお礼のつもりだったがさすがに我ももう辟易しているのだ。八幡からも何かいつて

やってくれまいか」

材木座はそう念押しする。

その日の放課後材木座が図書室にいるときにスマホにお悩み相談からのメールの着信がある

『あなた、比企谷くんに教えたでしょう』

「雪ノ下殿には悪いが欲望むき出しの小説を書けとかもう勘弁だからな、八幡に怒られると良いわ」

そして、無視を決め込み読書に没頭する。

しばらくするとまたメールが来る

『トイレに行った際に消したはずのデータをいつの間にかコピーされてたわ、これからプリンターがあるところに行って印刷してくると言ってるわ、比企谷くんに全部ばれてしまう、あなたのせいよ』

「雪ノ下殿はPC詳しくないからな、大方ゴミ箱に入れて消したつもりにでもなつてたのであろうな、ま、自業自得であろう」

そのまままた読書に没頭してしばらくしていると

『比企谷くんが帰ってこない、あなた今どこにいるの？比企谷くんみてないかしら？』
いい加減めんどくさくなった材木座は

『今図書室におるが八幡は見てはおらぬ、そんなに気になるなら探しにいけばよかろう』
そうメールするとまた読書に戻る、しばらくするとまたメールがくる

『プリンターがあるところに行ったけどいかなかったわ、本当にしらな』

中途半端なメールが来る、首をかしげているとしばらくして比企谷から着信がある

『すまんな材木座、もう小説は要らないからな本当に色々迷惑をかけてすまん』

「いやまあ我が勢いで書いた物が発端になっているし雪ノ下殿が全部悪いわけでは」

と話していたが電話口が妙な感じだった、なんかガサゴソとした音やムーという口を塞いだような声が聞こえる

「八幡？大丈夫か？そっちはどうなっている？」

『ああ、雪ノ下にはちよつとお仕置きが必要なからな、今逃げないように押さえてるところだ』

そう答える比企谷はいつもとずいぶんと雰囲気が違う、楽しくて笑いをこらえているようにも聞こえる。

「八幡？お仕置きとか押さえるとかその、大丈夫なのか？」

なんか大分おかしいことになっている感じである

『大丈夫だ。お前のお陰でこいつの本性が分かったからな』

「こいつって… ちよちよつと！もしかや小説のようなことを…」

『小説？ふっなんのことだかわかりませんね、ああ、あとこつちには来なくていいからな、雪ノ下のことは：：ククク、任せてくれ』

不穏な笑い声と共に電話を切られる。

「：：きつと八幡が雪ノ下殿にきつちり言ってくれてるんだろう！深くは考えないことにするか」

材木座は帰ろうと図書室を出て昇降口で靴を履き替えようとしたらまたメールが来る

『比企谷くん、にお置ききされちます、全部シテクレルそうなのでとても楽しみしあわせでうs、小説のことd、ご迷惑を、おかけしてごめんあさい。』

「なんだこれ？：： そういや後ろから責め立てながら作業をさせるとかいいうシチュエーションもあつたような：： それに全部って結構なバリエーションあつた気もするが本当にやるのか？なんかハードなものもあつた気もするが：： もういいや：：」

材木座は校舎を振り替へり奉仕部のある辺りを見る。

「まああれだ、雪ノ下殿はああいうのが好きみたいだし八幡も嬉しそうだっしいいか、これは誕生日のお礼的な？」

そう言うともうしばらくはエロ小説はお腹一杯だなど思いつつ今度からからどういう顔して奉仕部へ行けばよいか思案しながら帰路につくのだった。